

10分講話

－ 憩い－

原稿：中山 眞里（ノートルダム・ド・ヴィ会員）

【音声】10分講話

祈りについてのシリーズの最終回です。読みにくい、あるいは聞きづらいこともたくさんあったことと思いますが、祈りについてのひとつのアプローチに過ぎませんので、これからみなさんが祈られるときのひとつの参考になればうれしいです。では今までのお話を振り返りながら最後のお話しを始めましょう。

■霊のうめき

祈りについてのお話をしようと思ったきっかけは、「祈りって何？」という友人の言葉でした。彼女への答として、祈りについて何らかのヒントを伝えることができれば、というのが最初の動機でした。

この友人だけではなく、洗礼をうけてキリスト者となった多くの方々が祈りとは何なのか、どうすれば祈れるのかという問いを一度や二度は心にいだかれたことがあると思います。祈りとは何かというこの問いを少し深く探っていくと、わたしたちの心の奥深くに強い憧れ、激しい望みがあることに気づかされます。既に旧約聖書のなかで詩編の作者は次のように表しています。「深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。」(130)

わたしたちの心の深奥にあるこの叫びが、イエス・キリストという一人の御方に出会い、その方に向かうとき、それはキリスト者の祈りとなります。しかし語りかける相手を見出すことができず、その叫びが受け止められずに宙に浮いてしまうとき、その激しい力は自分を蝕みかねません。そのためわたしたちはややもすると、自分の身近な手の届くものにその想いを託してそれに愛着してしまいます。それが聖書のなかで繰り返し語られる「偶像」です。

ところでパウロはローマ人への手紙のなかでその想いを「うめき」という言葉で表現しています(ロマ8・26)。パウロの言葉を聴きましょう。

わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、《霊》自らが、言葉に表せないうめきをもってとりなしてくださるからです。(ロマ8・26)

わたしたちは心の奥底にある深い望みに言葉を与えることができません。ときにはそれが何なのかすらわからないのです。それに対し、パウロはその深い想いを、霊、聖霊が言葉に表せないうめきをもってとりなしてくださるというのです。それは「アバ、父よ」(ロマ8・15)という霊の叫びだとパウロは述べています。わたしたちの心の深奥の想い、それはわたしたちを造られた父のもとへ、いのちの源へ還ろうとする願いだと言えるのです。

ところで、前の教皇ベネディクト 16 世はパウロのこの箇所を次のように解説しておられます。

(…) わたしたちは祈りたいと望みますが、神は遠く離れたところにおられます。わたしたちは、神と語るためのことば (…) を持ち合わせません。(…) わたしたちにできるのはただ、自分の心を開き、自分の時間を神に自由に使っていただき、わたしたちがまことの対話を始められるよう神が助けてくださるのを待つことだけです。

(…) 聖霊はこの祈りを理解してくださるだけでなく、それを神のみ前にもたらし代弁して下さいます。このわたしたちの弱さこそが、聖霊を通じて、まことの祈りとなり、神とのまことの触れ合いとなるのです。(『新約の祈り』教皇ベネディクト 16 世 カトリック中央協議会 パウロ文庫 p51)

聖霊こそ、わたしたちが神とのまことの対話を始め、さらには神と触れ合うのを助けてくださる御方なのです。わたしたちが常に聖霊に心を開いていなければならない理由がここにあります。祈りの前、中、そして祈りの後に再び生活にもどっていくときに、つまりいつも心を聖霊に向け、その導きを願いましょう。

■ 祈りの困難を受け入れ

とは言え、いつも聖霊に心を開いていることはなかなか難しいのです。祈っているときには、体の不調、心の不調、様々な心配ごと、怒り、恐れ、罪への後悔などありとあらゆるものが、祈りという外界から閉ざされた意識のなかに押し寄せます。そのため聖霊に心を開いているつもりで始めた祈りが、いつのまにか自分のモノローグになったり、心に浮かぶ様々なイメージを知らず知らずのうちに追いかけてたりして時間を過ごしてしまいます。けれどこのような自分の弱さや貧しさの体験をしても驚かないようにしましょう。ましてそのために祈りをやめてしまうならまったくもったいないことです。教皇が述べられるように、「このわたしたちの弱さこそが、聖霊を通じて、まことの祈り、神とのまことの触れ合いとなるのです」から。わたしたちは自分の弱さに気づいています。そして幸いにもイエスは人間の弱さをよくご存じです。ですから安心して弱さを受け入れてください。あるとき、沈黙の黙想会のなかで若い女性が声をあげました。「沈黙していると緊張します」と。正直な言葉です。では、そこから出発しましょう。沈黙すると緊張するわたしを静かに受け止め、短い沈黙の時間から始めましょう。ではそれほどまでして祈らなければならないのでしょうか。そうなのです、わたしたちの心の最奥におられる神と親しく語り合う祈りは、それほど大切に貴重なものです。たとえ意識されなくても、わたしたちは祈りを通して、聖霊によりキリストに似た者に変えられていくのですから。

■神の霊はわたしたちのうちに

そしてその聖霊はわたしたちのうちに住まわれていること、言い換えれば、「わたしたちは聖霊の神殿」であることを心に留めてください。ですから主と語るのに実は遠くまで行く必要はありません。わたしのうちに、わたしを知り尽くし、そして愛してくださる方がそこにおられるのです。

わたしたちは自我の固い殻から抜け出して、わたしたちの深奥におられる神に少しずつ近づきます。祈りの深まりとはこの歩みそのものです。この歩みは決して平坦なものではなく、様々な喜びや困難を伴っていきますが、神に近づけば近づくほど人々にもまた近い存在となっていくことでしょう。

前回のお話のなかで、最愛の娘を亡くされた女性のエピソードをご紹介しました。死の数か月前からまったくコミュニケーションがとれなくなってしまった娘が亡くなった後も、その女性は娘が生きていることを確かに感じると語っておられました。その体に触れることができないのが寂しいとしても、娘は生きていると。聖霊において最愛の娘と出会われたのではないのでしょうか。

最後に、聖アウグスティヌスと共に神にわたしたちの心を静かに神に向けて終わりたいと思います。

あなた（神）はわたしたちを、ご自身に向けてお造りになりました。ですからわたしたちの心は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです。（『アウグスティヌス』山田晶訳 中央公論社）

ありがとうございました。